

琉球大学学術リポジトリ

2020年度知能情報コース学習サポートを実施して

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2022-05-18 キーワード (Ja): 学習サポート, コロナ禍, モチベーション支援, 先輩との定期面談 キーワード (En): 作成者: 當間, 愛晃, 岡崎, 威生, 遠藤, 聡志 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002017934 |

2020年度知能情報コース学習サポートを実施して

當間 愛晃、岡崎 威生、遠藤 聡志
琉球大学工学部工学科知能情報コース

要 旨

本稿では知能情報コースで実施した学習サポート事業の概要を紹介するとともに、利用実態とその影響について報告する。2020年度はコロナ禍という特殊な環境下を強いられたことから従来とは異なる施策として先輩学生との定期面談を中核としたモチベーション支援についても試行した。利用者追跡調査からはおおよそ平均GPAの継続した改善がみられ、一定の効果を確認することができた。

キーワード

学習サポート、コロナ禍、モチベーション支援、先輩との定期面談

1 はじめに

2020年度大学教育支援経費により「基礎学力低下対策のための知能情報コース基礎科目および専門科目学習サポート事業（以下、本事業と呼ぶ）」を実施した。本稿ではまず事業概要を紹介し、利用実態と利用者に与えた影響について報告する。最後に本事業の成果をまとめ、行き届いていない点を述べる。

2 前回の振り返りと2020年度前期を終えた時点での状況

本コースでは継続的に修学支援を行っているが、毎年何かしらの課題が残されている。特に2019年度における成果と課題[1]を振り返ると表1のようになる。

表1 2019年度の成果と問題点

| | |
|-----|---|
| 成果 | 追跡可能な利用者の平均GPAが改善傾向（2019年度前学期3.20、2019年度後学期3.35、2020年度前学期3.38）にある。 |
| 問題点 | GPA数値を見て分かる通り元々GPAの高い学生による利用が多い。評価の低い学生にはサービスが行き届いていないか、もしくはそれらの学生自身の修学に対する意欲等精神面を含めた支援を実現できていない。 |

表1に加え、2020年度はコロナ禍により4月冒頭2週間が休講、3週目からオンライン実施となり、その後も前期はほぼ同じ状況が継続し、後期から人数制限等の工夫を試みながら一部授業が対面実施となった。オンライン授業であることが殆ど問題にならない、もしくはむしろ日常の通学時間ゼロによる時間確保やオンラインでの相談等をうまく活用できる学生にとってはお

およそ修学に集中しやすく、効果的な環境を構築できたようである。他方、連絡手段や遠隔授業参加手段が授業毎に異なるといった複雑な情報環境、日常的なやり取りが一切なくなったことによる交流・会話ゼロ、一人暮らしによる孤独や家族内で完結してしまう閉鎖空間、生活空間と修学空間の同一化による気持ちのリセットができない状況等様々な要因がマイナスに働き、修学継続に支障をきたす学生も現れ始めた。2020年以前もモチベーションを保てない学生は存在していたが、2020年度に入り半年程度経過した時点では「やりたいとは思っているがやれない」という意思表示をする学生も現れ始めた点が大きく異なるように感じる。

こうした背景を踏まえ、2020年度前期は新たな修学支援を試みた。教務委懇談会（岡崎・國田・當間）における検討により従来の学習サポートに加え、試行的に**モチベーション支援**を検討し、コース会議における同意を得て実施した。モチベーション支援とは、様々な理由でなかなか勉強に手を付けられない、後回しにしてしまう学生への支援を想定しており、計画立案・見直しといった自己管理できるよう手助けをすることを主題とし、対象学生毎に固定した先輩学生を割り当て、毎週の定期面談を設定することで持続を図る支援体制を整えた。年の近い先輩との定期面談があることで何気ない雑談をする場も提供でき、そこから将来について話し合うといった幅広い意味での繋がり構築に効果があった。相談の中ではプライバシーに踏み込むこともありうることから、サポーターへは教員による事前面談を通して意義や取り組み方・注意点について情報共有をした上で取り組んでもらうと共に、定期報告を通して教員との問題共有に務めた。これにより一部の学生はGPA改善に結びついたが、他方では対象学生自身が乗り気ではない等の理由から全く連絡が取れない学生も発生した。この試行実施を踏まえ、後期は「学生自身による希望の有無」を確認した上で実施することにした。

3 今年度の実施方法

本事業は2020年11月から2020年1月にかけて大学院生（一部成績良好な学部生を含む）による学習サポートを実施した。実施内容は(1)なんでも担当、(2)科目担当(微積, OS, プログラミング)、(3)モチベーション支援の3種類を用意した。サポート学生の準備が整った頃にコース会議にて各授業での周知を依頼すると共に、専用の連絡網を通して週毎の開催情報を周知した。実施方法は全てオンライン（Zoom, discord）である。

なんでも担当は、科目を指定せず対応する先輩学生であり、毎週開催しつつその場で対応できない内容については持ち帰り後日回答により対応してもらった。

科目担当は、文字通り特定科目を指定した上での相談対応であり、主として月末に実施した。毎週としなかった理由は「なんでも担当」がいることと、月末には積み残した不安材料を片付けることを利用者に意識付けることで振り返りそのものを強制したかったこと、また一度の開催日における利用回数（費用対効果）の改善を意図してのことである。

モチベーション支援は、2節で述べたように対象学生毎に固定した先輩学生を割り当て、毎週の定期面談を設定することで持続を図る支援体制を整えた上で実施した。学生毎に定期面談日を調整し、毎週特定時間に話をする場を設けてもらった。

4 利用実態

本事業の利用実態の概要を表2にまとめた。モチベーション支援は定期面談を実施しているため実施回数や累計利用者数としては10倍程度多い数となるが、固定メンバでの実施となることから実際の人数のみを記載している。2019年度は累計利用者数40名であったことを踏まえると、(1)+(2)だけでも2倍に増加しており、実施内容が同じであっても実施方法をテコ入れすることで大きく改善できていることが分かった。今回からの取り組みである(3)については当初予定よりも希望者が多く、サポーター確保の面で相当苦勞するほどであった。

表2 2020年度後期の利用実態の概要

| 実施方法 | 実施回数 | 累計利用者数 | 主な内容 |
|---------------|-------|----------|---|
| (1) なんでも担当 | 37回 | 53名 | 主にOS、プログラミング。稀に微積・実験。 |
| (2) 科目担当 | 30回程度 | 27名 | 主にOS。 |
| (3) モチベーション支援 | 個別実施 | 13名×面談回数 | 現状把握、目標検討、計画立案、達成度確認、計画再検討、進路相談、日常雑談など。 |

5 利用者にと与えた影響

学習サポートとしての効果を確認するため、明確に追跡できる学生を対象に利用前後における成績の変化を確認した。本事業の実施時期は2020年度後期だが試行を前期からやっていたため、2019年度後期・2020年度前期・2020年度後期の3学期に跨るGPA推移を示す。なお個人を特定できないよう平均した値を記している。また一部の学生は途中で休学を挟んでおり、その際には平均値に含めていない。

表3 GPA推移

| | 追跡人数 | 2019年度後学期 | 2020年度前学期 (試行時期) | 2020年度後学期 (本事業実施時期) |
|---------------|------|-----------|---------------------|------------------------|
| (1)と(2)の平均GPA | 19名 | 2.94 | 3.18 | 3.28 |
| (3)の平均GPA | 13名 | 1.70 | 1.09 | 1.32 |

表3より、追跡できる学生については本事業前によりGPAの改善傾向が見られる。(1),(2)については昨年同様(表1)、元々成績が高い学生の利用が多く、利用者はより高い評価を得ていることが分かる。(3)の試行時期では逆に下がっており、全学生へ強制的にモチベーション支援を導入することには問題があることを示している。一方、学生自身の希望を踏まえて実施した本事業期間においては成績を持ち直しつつあることが分かった。ただし(1),(2),(3)全てに共通してこれらは平均値であり、一部の学生は下がっていることに注意を要する。しかしながら新方式であるモチベーション支援利用者はその後の継続利用を望む声も多いことから、一定程度は昨年時点で行き届いていない学生へリーチでき、また、遠隔授業環境における支援としても機

能したといえるだろう。

6 成果と課題

全利用者に対する追跡調査ではないため不十分ではあるが、一定の効果があることを確認できた。特に2020年度の特異な環境下におけるメンタル面を含めた支援方法の模索として取り組んだモチベーション支援により、一定程度学生への支援を達成できたといえる。一方、これらの支援に依存しすぎるがあまり自立できないようでは教育としての効果に疑問が残ることから、自立への手助けを見据えた施策検討が必要だと思われる。これ以外にも細かな問題点があるが、それについては新担当へと引き継ぎを行った。

参考文献

[1] 遠藤聡志、岡崎威生、當間愛晃、“2019年度知能情報コース学習サポートを実施して”，琉球大学教育センター報，No. 23，pp. 60-61，2021/3.